

## I 導入部

おはようございます。2026年度最初の日曜日、今日はイースター礼拝です。イエス様が私たちの罪の身代わりに十字架で死んで、墓に葬られましたが三日目によみがえらされて罪と死に勝利されました。復活の喜びのイースター礼拝です。第二礼拝では2名の方の洗礼式、1名の入会式、第三礼拝では1名の洗礼式が行われます。4名の方々の青葉台教会での信仰生活が豊かに祝福されますようにお祈り下さい。2026年度の最初の日曜日にイースターで始まり、2027年の3月の最後の日曜日は、これまたイースターで終わりになります。時々、1年で2回イースター礼拝があります。2026年度は復活で始まり、復活で終わる。とても良い2026年度になりそうです。

今日は、ルカによる福音書24章13節から35節を通して、「**ハートが燃えた**」という題でお話し致します。

## II 本論部

### 一、遮られて見えないからこそ

13節、14節には、「ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた。」とあります。イエス様が十字架にかかり死んで、墓に納められてから三日目に女性たちが墓に行ってみるとイエス様の遺体が見つからずと途方に暮れていると天使から、イエス様は復活されたと聞いて、イエス様の「十字架につけられ、三日目に復活することになっている」という言葉を思い出しました。このことを弟子たちに伝えましたが彼らはたわごとのように思われて信じませんでした。ペトロが墓に行ってみると、亜麻布しかなく、この出来事に驚きながら帰った、というこの日に、二人の弟子がエマオへ向かって歩きながら、イエス様の復活の出来事を話し合っていたのです。15、16節には、「話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。」とあります。二人がイエス様の死と遺体が見つからない事の話をしている所に、張本人のイエ様が近づいてきて、二人と一緒に歩き始められたのです。しかし、「二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。」と聖書は語ります。16節をリビングバイブルでは、「しかし二人には、イエスだとはわかりません。神がそうなされたのです。」とあります。二人の目がさえぎられてイエス様だとはわからなかったのは、イエス様の死を悲しんでいたからだとか、遺体がない事に悲しんでいたというのではなくて、「神がそうなされたのです。」とリビングバイブルは語るのです。神様はなぜ二人の目をわざわざイエス様がわからないように遮られたのでしょうか。復活されたイエス様を見る、あるいは出会うには、人間の側の何かではなく、神様の方が備えて下さることなのでしょう。復活という人間には信じられない出来事は、人間の理性や知性、能力で受け入れよう、受け取ろう、理解しようとしても無理な話なのです。人間の側の理性や知性、能力で復活の出来事を理解しようとしても、

かえって、信じる、受け入れる、受け取る、理解するということの妨げになってしまうのではないのでしょうか。復活というのは、人間の側の何か、力で信じるということではなくて、神様から導いていただいて、神様の導きのもとで信じることによって、復活を受け入れることができるようになる。理解できるようになるのではないのでしょうか。

17節には、「イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。」とあります。イエス様はご自分の事を話し合っている二人に、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と問われました。リビングバイブルには、「イエスがお尋ねになりました。「何やら熱心にお話しのようですね。いったい何が、そんなに問題なのですか。」すると二人は、急に顔をくもらせ、思わず足を止めました。」とあります。二人はなぜ暗い顔をしていたのでしょうか。自分たちは、イエス様を先生として、救い主として大いに期待していたのにもかかわらず、十字架刑で殺されてしまった、というのではなくて、死んで墓に葬られたはずのイエス様のご遺体がなくなっている。そして、女性たちの話によると、「イエスは生きておられる」と天使が告げたことを聞いても、「イエス様は復活されたのか。やった！」とはならないのです。かえって悪い事にならないかを心配した。恐れたのでしょうか。イエス様の遺体が墓の中にはない。イエス様は生きているという天使の言葉も、二人にとっては何の力にもならないのです。かえって不安になったのです。私たちも信仰生活の中で、聖書の言葉が、生ける神様の言葉が何の力にもならない。かえって不安になるということがあるのでしょうか。私たちは、イエス様が共におられるのに、それが遮られて見えないということがあるのでしょうか。神様があえて見えなくしておられるのだとしたら、神様は、私たちにとっても大事な事を示そうとしておられるのだと思うのです。

## 二、聖書の言葉に帰れ

25節から27節には、「そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。」とあります。「物分かりが悪く、心が鈍い者たちよ、ほら私を見なさい。私が復活したイエスだ。」とは言いませんでした。そうではなく、「聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。」とあるように、聖書全体に、神様の言葉に彼らの目と心向けさせたのです。聖書を説明するよりも、自分が復活したイエスだと示した方が簡単で、わかりやすいように見えます。そのようにできるのにはできるのですが、イエス様は積極的に、ご自分を示そうとはなさらなかったのです。もしそうされたならば、今日の前にいるイエス様が復活されたイエス様だ、すごい、ということで、ただイエス様が復活したということだけがクローズアップされるだけに過ぎません。暗い顔をしていた二人は、復活のイエス様を見て喜びに満たされたことでしょうか。それは、ただ復活したということだけのことになってしまうのです。イエス様は、多くの奇跡や癒しを行われました。そして、多くの人々は病気の人が癒される姿を見て驚き神様を賛美しました。5つのパンと2匹の魚で、男の人5000人を養う光景に、恐れ驚き神様を賛美したでしょう。そのような奇跡

の業を見た全ての人々がイエス様を救い主として信じたかというところではありませんでした。一時の奇跡の業は信仰には至らないのです。奇跡を見たら信じる、という人々は、奇跡を見て驚きはしますが、イエス様を信じるまでには至らないのです。大きな働きや奇跡、人々があっと驚くような出来事は、人々には確かに何らかの影響は与えますが、信じるまでには、信仰には至らないのです。信仰はあくまで聖書、神様の言葉によるものなのです。イエス様は、そのことをよくご存じでした。ですから、復活したご自分を見せることは簡単であり、人々に驚きを与えることを知っていました。しかし、それは信仰どころかつまづきになってしまうこともあることをご存じだったのでしょう。

私たちは信仰生活の中で、目に見えるもの、奇跡や驚くような出来事が信仰に大きな影響を与えると考えてはいないでしょうか。もちろん、失われたものが与えられるとか、ダメだと思ったことから守られた、助けられたということ、数が増えた、大きくなった。そのことを神様の恵みや祝福だと思ってしまうことがあります。勿論、それは神様の祝福なのでしょう。しかし、それは一瞬の喜びや感謝になっても、長い信仰生活の力になっているのか、なっていくのかということそれは疑問です。多く与えられたことで、数が増えたことで、大きくなったことで、問題が起こり、混乱が起こり、分裂が起こるということはいくつもあることです。私たちは、いつでも目に見えるものだけに、奇跡や驚くようなことだけに目を留めて一喜一憂するのではなくて、いつでも、どこでも、どんな時も聖書の言葉に私たちの信仰の根拠を置いて、聖書の言葉で慰められ、励まされ、強められて行きたいのです。そのことをイエス様は示しておられるのだと思うのです。

### 三、信仰は心にじわじわと湧いてくる

28節、29節を見ると、「一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。」とあります。イエス様は、エマオに近づいてもなおさらに先に行こうとされたということは、イエス様は最後の最後までといたしましょうか。ご自分が復活したという事実を明らかにする、証明する、示すつもりはないということでしょう。二人が無理に引き止めたのでイエス様は二人と泊まるために家に入られたのでした。しいて引き止めるということは、時には大切な事なのかもしれません。そのことがなければ、この後のことはなかったのです。30節、31節には、「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。」とあります。イエス様がパンを裂いて渡すと、二人の目が開けてイエス様だとわかったのです。しかし、「二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。」とあります。せっかく、イエス様だと分かったのですから、ゆっくりして交わるということをしてもいいでしょう。水臭いような気がしますが、あくまでも、イエス様はご自分を積極的に見せようと、示そうとはされなかったのです。それは、彼らがイエス様は死んで葬られよみがえられたという復活の事実を受け入れるために、復活を信じるためには、ご自分を示すこと、見せることよりも、もっと大切なことがあるのだ、ということを示そうとされたからなのです。イエス様

は簡単に、単純に、自分が復活したイエスだと示す代わりに、「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。」とあるように、神様が長い歴史の中で、聖書を通して神様は深い救いのご計画と配慮を持って、私たち罪ある人間を救うために、神の子、救い主イエス様を十字架にかけ、神の裁きを受けさせ、尊い血を流させ、ご自分の命をささげ死ぬという神様の深いご計画の最後に復活されたことを示すために、十字架の死と深い関係の中で神様の救いのみ業を完成されたのです。復活そのものだけが一人歩きするのではないということなのです。

パンを裂いてイエス様が見えた瞬間、イエス様だとわかった瞬間に、イエス様の姿は見えなくなったのでした。イエス様を認めいなくなったイエス様の事を悲しんだのかというようにそうではありませんでした。32節には、「二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。」とあります。二人は、イエス様と共に歩いていた時、話を聞いていた時は、実は自分たちの心が燃えていたにもかかわらず、ハートが熱くなっていたということに気が付かなかったのです。あとから思い出して、「**そうそうあの時心が燃えていた**」とわかるのです。信仰というものは、その時、一瞬で信じるというよりも、後でじわじわと感じるもの、わかるものなのでしょう。ボクシングのボディーブローのように、その時は感じていなくても、実は効いていて突然倒れてしまうということがあるのです。イエス様は、奇跡や驚くようなみ業を人々に見せて驚かせて、イエス様が偉大なお方、すごいお方だと信じさせたり、何年も治らなかった病気を一瞬にして癒すという力で信じさせるというのではないのです。イエス様は、この二人が心の中で受け入れることができるまで、納得するまで、理解するまで待っていて下さるということなのです。イエス様の十字架と復活、つまり福音は相手を説得させるというものではありません。相手が、そうなのかと心を開くことを待つということなのでしょう。イエス様は事実復活しました。ですから、復活したことを言っても、示しても何も問題はありません。どうだと復活の力で信じさせようとすることはできるのでしょう。イエス様は彼らの目が開くまで待って下さったのです。あくまでも、聖書の言葉、神様の言葉を示すことを、語ることを優先されたのです。イエス様が家に入って二人との交わり、食事席で、二人の目が開かれたように、イエス様は私たちと人格的な交わりを求めておられるのです。

### Ⅲ 結論部

二人はイエス様だとわかった瞬間、イエス様が見えなくなりました。しかし、「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」とイエス様の復活の事実についての確信はゆるぎないものになっていました。最初彼らの目が遮られてイエス様のことがわからなかったということは、二人が聖書の言葉、神様の言葉を通して確信させるということが、イエス様のお心だったのではないのでしょうか。私たちはイエス様を信じて信仰生活を送っていても、悲しみや苦しみ、痛みや絶望を経験します。そのような時、奇跡や心躍るような出来事を求めるというよりは、変わることを祈る聖書の言葉、神様の言葉、み言葉に照らし合わせて見る。み言葉を通して、神様に、イエス様に目を留めるということが大切な事なのです。私たちが、信仰生活の中

で、期待していたことが、望んでいたことが打ち砕かれたり、だめになったりして、苦しみや悲しみを経験する時、そこには希望はどこにもないように見えます。しかし、私たちの信じる神様、イエス様は苦しみや悲しみ、痛みや絶望を通して、良いものを、恵みを備えて下さるお方なのです。私たちのハートを熱くして下さいなのです。クレオパともう一人の弟子は、イエス様が示して下さいた聖書の言葉を通して、解き明かしを通して目が開かれ、熱き思い、ハートを熱くされたのです。二人にそのようにして下さいたイエス様は私たち一人ひとりにも、聖書の言葉を通して、私たちの目を開き、見るべきものを見させ、私たちのハートに燃える心を与えて下さるのです。

ハートが熱くなった二人は、温泉に入ることもせず、エルサレムに引き返したのです。弟子たちが集まっているその中で、イエス様はペトロに現れたことを聞き、自分たちもイエス様が聖書を示し解き明かして下さいたこと、イエス様の姿は見えなくなっても、自分たちのハートは燃えたということをつかち合ったのです。私たちは聖書のみ言葉で養われ、従って行動することで神様の恵みを体験をします。その体験をしまっておくのではなくて、体験したことを証しするということが大切な事です。礼拝の説教やデイポーションで導かれた恵みを私たちは、礼拝後に、あるいはグループで、祈祷会で、様々な機会に分かち合っ、恵みを共有してハートが熱くなる経験をさせていただきたいのです。この週もイエス様は私たち一人ひとりと共におられます。そしてその核心は、聖書に触れることで、聖書のみ言葉を通して、イエス様が共におられることを感じ、信じて、熱き心でこの週もイエス様に全ての事をお委ねして、お任せして歩んでまいりましょう。